

## VI. 研究グループ 中間報告

### 1. ソーシャルライフ

## ソーシャルライフの今後の展望と提言<sup>1)</sup>

木 下 雅 仁・吉 田 俊 和<sup>2)</sup>  
中 村 明 彦・飯 島 幸 久  
大 林 直 美・加 藤 容 子  
薫 森 英 夫・長 瀬 加 代 子  
西 川 陽 子・山 田 玲 子

### 1 はじめに

2004年度のソーシャルライフ研究グループでは、現行の中学1・2・3年生の授業プログラムの実施方法の発展的改善と、中高一貫カリキュラム開発の視点に基づく高等学校におけるソーシャルライフの授業プログラムの開発の可能性についての検討を、主なタスクとして認識してきた。以下、本稿においては、2000年度より中学校で実施されてきたソーシャルライフの授業プログラムの評価と課題点の整理を進めながら、中高全体で今後どのようにソーシャルライフの授業実践を展開していくべきかについて提言を行うものとする。

### 2 研究グループからの提言（中間報告）

#### (1) 中学1年生用ソーシャルライフの授業の今後のあり方について

中学1年生のカリキュラムの上では、道徳の時間にソーシャルライフ（以下、SL）を実施していく。

なお、実施に関わっては、以下の点について確認することが必要になろう。

##### ① 担任によるソロ・レッスン

現在は、副担任主導による授業を実施し、正担任が補助者として授業に参加するチームティーチングの形式を取っているが、プログラムが成熟してきた事実に鑑み、正担任による単独授業（ソロ・レッスン）実施に転換していくことが現実的であると考えられる。

##### ② 現在のSLの授業時間の処置

現在の中学1年生のカリキュラム上では、SLは週1単位割り振られている。この授業を道徳の授業時間に吸収する場合、空白になる1単位を別の科

目・教科の授業に振り替えるのかどうか検討が必要である。また、研究開発学校指定が終了した場合、現行の週30単位制から28単位制への転換が求められる。その場合についても併せて検討する必要がある。

また、この問題についてのさらなる検討は、カリキュラム委員会との連携が不可欠である。

##### ③ SLをする時間以外の道徳の時間の使い方の工夫

これまで道徳の時間内に行ってきた学習内容を精選し、SLのプログラムを取り入れるためのシラバス作りと時間の確保を行わなければならない。

##### ④ 授業研究の必要性

2000年度以来、SLは学年団がひとつのチームとなり、共同で授業作りを行ってきた。もし、今後、担任単独によるソロ・レッスンの方法をとるのなら、担任に対する授業実践に関わる伝達講習が必要となろう。

そのためには、校内に引き続きSL研究グループを置き、絶えず授業研究を行い、SLの授業を実施する担任の支援活動を継続的に行っていくことが必要になる。

#### (2) 中学2・3年生『ソーシャルライフ』の授業の今後のあり方について

中学2・3年生のカリキュラムの上では、「道徳」の時間にSLを実施していく。

なお、実施に関わっては、以下の点について確認することが必要になろう。

##### ① 担任によるソロ・レッスン

上述の中学1年生のケースの①～④と同様に、中学2・3年生のSLの授業についても、学級正担任による授業実施を目指してゆき、それに伴う周位的条件も整備していく。

##### ② 体育科とSL

これまで、中学2・3年生のSLの授業は、体育

1) 本稿は、2004年8月31日の職員会議で本研究グループが報告した「中間報告」の内容を、加筆・修正したものである。

2) 学校長・名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授(社会心理学)

科の教員によって年間10時間程度実施されてきた。その場合、体育の授業時間の一部を使ってSLを行っているため、体育科の教員に授業・教材研究の負担を強いることになっていた。また、生徒の間でも、体育の授業時間が減ることに対する不満の声も上がっていた。

研究上の観点からいえば、体育科の教員によってSLの授業担当者が固定されてきたため、授業の内容や生徒からのフィードバックが校内全体に還元されにくくなっていた反省もある。

### (3) 高等学校版SLプログラムの開発の可能性の検討

中学校におけるSLの授業プログラムは、実施方法には課題が残るものの、内容については完成の段階に達している。本校は併設型中高一貫校であることから、中高一貫カリキュラムの研究開発に邁進していくことは、学校の存在理由に関わる前提条件であるため、SLに関わっても、中高一貫カリキュラム開発にアプローチできないか検討を行ってきた。

現状では、高校1年生で「SL」と称する時間が設定されているものの、中学SLのプログラムとの関連や系統性を持たない。そこで、中学校と高等学校のカリキュラムを接続しうる新しい高等学校版SLの授業プログラムの開発と実施についての可能性の検討作業を始めることは、一定の意義を持つことであると認識される。

## 3 前年度の授業実践より得られた研究成果と課題

### (1) 成果

#### ① 新しい授業形態の試行 (2003年度)

昨年度の授業開発における主たる成果は、中学校1年生の授業実践において、「担任が授業者としてSLの授業を担当し、50分間(1コマ)の時間内でひとつのプログラムを実施する」授業形態の試行を行い、その形態でもこれまでと同様の趣旨・内容の授業を展開することが可能であることを確認できたことである。

本校におけるSLの授業プログラムは、当初、授業時間や人的資源を豊富に活用できるという前提条件のもとに導入された。しかし、そのような特殊で恵まれた条件が他の一般公立中学校などで保証されることは現実的には考え難い。本校における授業実践やそこから得られる知見をフィードバックするためには、一般の中学校における授業の実施に適用できる形態での試行と、効果や意義の検証を行う必要がある。本年度は、先に述べたように、「副担任が授業者になる」、「担任と副担任のティーム・ティーチングを常時行う」、そして「毎回2コマの授業時数を充てる」という従来の慣例を発展的に改善し、「1コ

マ(50分)の授業時間内に、担任が授業者として授業を実施する」というスタイルで授業実践を行った。

これまでは吉田・廣岡・斎藤(2002)らによる『教室で学ぶ「社会の中の人間行動」—心理学を利用した新しい授業例—』に示されている授業プラン(指導案)に忠実に授業を行うことが多かったのだが、昨年度の授業改革を足がかりに、今後も本校における教育課程や生徒のニーズ・実態に対応した形で新しいSLの授業のあり方を模索し、開発を進めていく必要がある。

### ② 研究成果の公表

SLの授業の実践と観察の蓄積から得られた「授業実施の方略」、「期待される効果」、「生徒の取り組みの様子」などについてのフィードバックを整理し、次に示す二つの場で本校の取り組み状況についての研究発表を行った。中学1年生の授業プログラム全般と授業の実施方法については、木下(2003)が学校心理士会東海支部第9回総会時研修会で研究発表を行った。中学2・3年生のプログラムの内容や実施方法については、中村(2004)が本校主催の中等教育研究協議会において、授業公開をした上で分科会において研究発表を行った。いずれの場合も多くの聴衆が集まり、盛況であった。また、この取り組みに関わって多くの建設的な質問や問題提起がなされ、主に一般の中学校の教員と思われる参加者諸氏のSLに対する関心の大きさ、本校の取り組みに対する肯定的な評価を確認することができた。

### (2) 課題

#### ① さらなる授業開発の発展的展開

2000年度から本校において実施しているSLの授業は、吉田・廣岡・斎藤(2002)らによる『教室で学ぶ「社会の中の人間行動」—心理学を利用した新しい授業例—』の出版に代表されるように、さまざまな学会や研究会で紹介されてきた。それに伴って、いくつかの中学校では、このSLの理念や方法的なアイディアを参考にしながら、「新しい道徳教育のあり方」を模索したり、「人権教育の授業実践」に加工して活用するなどといった発展的な授業実践例が報告されている。(例えば立川：2004)

本校においては、これまで先述の名古屋大学大学院教授の吉田俊和氏の研究グループによって開発されたオリジナルのプログラムを、忠実に実践に移すことに勢力を注いできた。しかし、それはプロトタイプ(prototype)でしかなく、「2コマ連続の授業形態」、「担任と副担任のティームティーチング」、「副担任が授業をする」などの原則的な点においては、「本校でのみ実施可能」な要素も多く、このま

までは一般化するほど消化しきれていないことになる。生徒の「社会志向性」や「社会的コンピテンスを高める」という原則的な理念の部分は生かしながら、積極的な授業開発をもって、本校からSLの発展的で応用的な“加工方法”を提示し続けていく必要があるだろう。

#### ②中高一貫カリキュラムの中における位置づけの明確化

現在、本校においては中学1年生で年間約30時間、中学2・3年生で年間各約10時間を使ってSLの授業を実施しているが、「1-2-2-1制」の中高一貫カリキュラムの中で、このSLという科目がどのような位置づけにあり、どのような流れで学習が進められるのか、さらに明確にする必要があると認識している。中高の接続の部分での系統性を意識し、高校生向けのSLのプログラム開発などを念頭に置いて、中学3年生で学習のストリームが完結、あるいは、分断されることのないように発展的なカリキュラムの開発に踏み込むことが求められよう。

#### ③校内における授業の運営方法の改善と見直し

中学2・3年生のSLの授業においても、道德の時間を利用し、担任による授業展開が望ましいと思われる。当初同時展開しないと内容が隣のクラスに漏れるからやりにくいという懸念があったが、実験的に別の内容で行った授業が次回に影響があったとは感じられなかった。

ただ、担任が実施するためには、教員に対するSLの授業研究を行う必要がある。そのためには、SLの研究グループが中心になって公開授業を頻繁に行う必要があるだろう。

#### ④取り組みの成果・効果の検証

SLはゲーム的なアクティビティを中心とした活動型の学習プログラムである。体験型の学習方法を通じて、生徒たちに「社会志向性」や「社会的コンピテンス」を高めてもらうことが、この授業の趣旨である。しかし、「社会志向性」や「社会的コンピテンス」というものは、即座に向上するものではない上に、その量的な観察・測定は現実的には困難である。SLは「特効薬」的な授業と言うよりは、「予防プログラム」的な授業であることが前提として校内で共通認識される必要がある。

その上で、以下のような作業を行うことも必要であろう。

ア.『教える側が特定の価値観を押しつけるのではなく、事実を提示し、それをもとに生徒が自分たちで理解を深めていき、生徒の考える能力を刺激する授業展開』であるという主旨を忘れてしまい、教師側が結論のようなもので授業をまとめてはいないか点検が必要である。

イ. 毎時間の授業の感想は書かせるだけで終わってしまっているの、何らかのフィードバックが必要と思われる。

ウ. 授業実践の報告だけでは、このプログラムの有用性や効果を説得力を伴ったかたちで証明することができない。この取り組みを行うことによって、生徒、教師、そして学校がどのような影響を受けたのか、何がどのように変わったのか（変わりつつあるのか）などを詳細に記録・分析し、質問紙等による調査の実施や結果の分析だけではなく、面接法などをも導入して、質的な調査や分析も行っていく必要があるだろう。

## 4 ソーシャルライフの現状と今後の展開 ～まとめにかえて～

### (1)研究者の立場から見た現状

この授業は、教師にとって最初は違和感があるようである。その理由は、「生徒に教えないこと」にあるらしい。授業のコンセプトが、「生徒たちに考えさせること」であるため、自分が授業をしても自分の考えを教えられることは、通常、経験していないことによる。それは、ちょうど親が子どもの自発性を育もうとすると、最善の方策を最初から与えるのではなく、子どもが試行錯誤しながら到達したときに「ほめる」だけの場合と似ている。教科の授業では、正解が決まっておき、教師はそれをできるだけ効率的に教えようとする習性が身につけてしまっているの、生徒の日常の考え方や行動にまで、正しい答えがあるように教えようとしてしまうことである。しかし、生徒同士のトラブルや社会的な価値の問題に正解はなく、多様な考え方を理解し合い、どのように解決していくかを体験させる方が、結局は日常生活では役立つことになる。この授業は、その題材を提供しているに過ぎないのである。生徒たちの思いがけない意見に、教師の方が「目から鱗が落ちる」場合だって、ありうるのである。

生徒にとっては、この授業は教科の授業と違って、評価される心配もなく、ゲーム感覚で参加でき、新しい発見があったりすると、楽しいらしい。しかし、その一方で、教えられはしないが、隠れたメッセージ（こちらが正しいのだよ）を読みとり、道德的な匂いを嗅ぎ取ってしまう場合もある。教師が「授業の背景には教訓的なものがあるのだぞ」という姿勢で臨むほど、生徒の側に構えができ、この授業の目標は、達成されなくなってしまう。知的に高い生徒ほど、そうした傾向は強い。逆に、体験したことを、面白かったか、つまらなかったかだけで捉え、何も考えようとしないう生徒も出てくる。両者をうまく考えさせるのが、この授業の教師の役割でもあり、成功の秘訣でもある。

心理学研究者としてのジレンマは、「どのように効果が出てくるのか」と問われることである。3年の間に、いくつかの指標として心理的尺度（共感性、社会考慮、社会的スキル尺度、道徳性など）を実施してみたが、明確な効果を得ているわけではない。個々の授業の感想を読んでも、1回や2回の授業でこちらが意図しているような効果が表れているわけではない。おそらく、体験の積み重ねにより、「考えようとする力」が生まれ、日常の行動を繰り返すうちに、「考えて行動すること」がポジティブな結果を生み出すという正のフィードバックが得られて、対人関係に関する能力、集団の運営能力、社会志向性などが高められていくのであろう。そのプロセスにもかなりの個人差があると思われる。したがって、長期の日記形式による個人の自省力を見るためのワークシートを用いたりすることが有効かもしれない。

## (2)高校生への展開

これまでの授業で、自分自身の行動や対人関係、自分と集団との関係などについては、十分な授業プログラムを提供してきたが、「社会」について考えさせることはできたのだろうか。「2人じゃんけんゲーム＝四人のジレンマゲーム」を通して、他者と協力することの重要性を組み込んだに過ぎないのかもしれない。もちろん、そこでは、社会的な具体例などを考えさせたりしているが、必ずしも十分ではない。ソーシャルライフの授業では、「社会」について考える能力を刺激することを目標としていた。換言すれば、誰もが社会の一員であり、我々は相互依存的な関係にあることを理解して欲しかったのである。

しかし、「社会」について考えることは、それだけにとどまらなくなってくる。自分の判断を、より合理的な根拠によって決定しようとする志向性である。例えば、原子力発電所の建設に、感情的な反対を唱えるだけではなく、なぜ反対するのかの合理的な根拠（データ）を持つようとする姿勢も重要になってくる。いわゆるリスク・コミュニケーションと呼ばれるものである。ソーシャルライフの授業を始めるきっかけとなった「社会的迷惑行為」の研究において、社会考慮という概念が提起された。これは、個人の生活空間を「社会」と意識している程度、または複数の個人からなる「社会」というものを考えようとする態度である。この概念が、リスク・コミュニケーションによる行動判断と強い関連性を持っていることも明らかにされている。こうした授業を高校生に展開できないかというのが、現時点で考えていることである。

(1～3・補遺 文責：木下雅仁、4 文責：吉田俊和)

## 補遺 授業開発の経緯の概観 ～中学用プログラムを中心に～

### (1)これまでの経緯

社会的コンピテンスを高めるための学習体験を生徒たちに提供することを目的としたソーシャルライフの授業開発とその実践は、今年度で5年目を迎えた。この授業は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科の吉田俊和教授(社会心理学)らの研究グループによって、継続的かつ段階的に開発されてきた。2000年度は、中学1年生を対象とした授業プログラムが、吉田教授の研究グループによって実施された。2001年度は、中学2年生を対象としたプログラムが上述の研究グループによって実施された。平行して、中学1年生の学年団の教師たちに対しては、授業実践に関わる伝達講習が行われ、授業の実施は本校の教師の手に委ねられた。2002年度は、研究グループは中学3年生の授業プログラムを開発・実施し、本校の中学2年生のソーシャルライフ授業担当者に授業実施に関わる伝達講習が行われた。

表1に整理したような取り組みを過去4年間にわたり継続してきたことにより、ソーシャルライフの授業の目的や意義、本校のカリキュラムにおける本授業の位置づけなどについて、校内では合意を形成することができてきた。

注意：なお、高校1年生を対象としたプログラムは、体育のカリキュラムの中に組み込まれているため、運用は体育の授業時間内で必要に応じて実施されている。このプログラムについての報告は、ここでは割愛することを断っておく。

### (2)ソーシャルライフの授業実施状況

昨年度(2003年度)からは、中学1年生から3年生までのすべての学年において、本校に教員の手によって授業実践が行われている。

#### ①中学1年生

最初に本校教員で授業を実施し始めた2001年当時は、「生活指導とソーシャルライフの学習とを混同させたくない」との問題意識から、なるべく日常的な場面や題材を扱うことをさけ、極力注入主義的なメッセージの発信を抑えるために、授業者は副担任が担当し、補助者を担任が担当するというチーム・ティーチング制を導入していた。また、授業は各週で特定の曜日の5・6時間目をこの授業のために充てていた。

しかし、本校ではそのようなシステムで授業が実施できても、他の一般校では「担任と副担任のチーム・ティーチングを常時行うこと」や、各週とはいえ、「毎回2コマの授業時数を充てる」ことなどは、導入可能な条件ではないと思われることから、2003

研究・開発の段階	吉田俊和教授・研究グループ	附属学校
第一段階	大学教員ら研究者による授業の開発 (理念・理論の確認、授業の手続きの開発)	
第二段階	パイロット・プログラムの授業実施 2000年度 中学1年生 2001年度 中学2年生 2002年度 中学3年生	・授業観察(当該学年団) ・授業の実践記録 ・指導方法・技術の研究 ・研究グループとの学習会
第三段階	附属学校担当者に対する伝達講習会の実施 2001年度 中学1年生用プログラム 2002年度 中学2年生用プログラム 2003年度 中学3年生用プログラム	・伝達講習会での学習 ・授業実施 中学1年生(学年団) 中学2・3年生(体育科)
第四段階	研究成果の整理と公表 (学会発表、学術論文、出版物、講演など)	・授業の実施(中学1～3年) ・授業研究活動

表1 本校におけるソーシャルライフ授業実践の経緯

年度は従来の授業形態で取り組むクラスと、「1コマ(50分間)」で「担任が授業者」となる実施形態で取り組むクラスを設け、新しい授業形態の開発に発展的に取り組んだ。

②中学2・3年生

中学2年生と中学3年生で年間10時間の「ソーシャルライフ」を実施することになり3年目に入った。中学1年生の110分の授業内容ではなく、一般化を目標に1時限(50分)完結する内容に変更することで、時間割を構成する上で容易になった。ただし、中学2・3年生では当初より体育科の教員が担当している。「2クラス同時展開」で「年間10時間」という縛りが大きな要因と考えられる。そのため体育の授業を削ってソーシャルライフの授業を行っている現状は、生徒にとって運動ができない不満をしのらせていることが、ソーシャルライフに対する関心・意欲に多少とも影響しているように思われる。

【中学2・3年生「ソーシャルライフ」の実践】授業の基本方針

- (1)自分や身近な他者から集団や社会などへの関連や相互作用を関連づけること
- (2)生徒の生活と関連を持たせること
- (3)ゲーム的な要素を盛り込むこと
- (4)(社会)心理学的な背景が存在すること

中学2年：「より広い対象へのより深い理解」

「自分、身近な他者」→「集団」

<中2の授業スケジュール>

- 第1回：目の前にいない人の存在まで意識する
- 第2回：他者の気持ちや考えを推測する；社会的な場面での多様な視点の存在(他者視点取得)
- 第3回：グループとして知覚する心理；ものをまとまりとしてとらえる傾向
- 第4回：ステレオタイプに基づいた認知(前半)；典

型的な特徴のあてはめ(ステレオタイプの認知)同じような意見の人だけで考えると(後半)；集団討議で生じやすい事態

第5回：「まわりの人に合わせる」現象；同調行動

中学3年：「自分と集団との関係」

「自分に関わる社会」

<中3の授業スケジュール>

- 第1回 「私は何のグループ？」
- 第2回 「ポジティブ事態・ネガティブ事態」
- 第3回 「共通点を探す」
- 第4回 「報酬の分配」
- 第5回 「自分の意見はみんなの意見？」
- 第6・7・8回 「相互依存的な関係」

参考文献

- ・吉田俊和・小川一美・出口拓彦(他)(2000)「『社会志向性』と『社会的コンピテンス』を教育する—中学1年生を対象とした授業実践—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)』第47巻.
- ・吉田俊和・小川一美・坂本剛(他)(2001)「資料『社会志向性』と『社会的コンピテンス』を教育する(2)」名古屋大学大学院教育発達科学研究科『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)』第48巻.
- ・吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志編(2002)『教室で学ぶ「社会の中の人間行動」—心理学を利用した新しい授業例—』明治図書.
- ・中村明彦(2003)「3. ソーシャルライフの実践(新しい取り組み)」、名古屋大学教育学部附属中・高等学校「平成14年度文部科学省研究開発学校研究開発実施報告書(第3年次)『高大の連携』を生かした『青年期のキャリア形成』—総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発—」pp.45-48.
- ・吉田俊和・斎藤和志・石田靖彦(他)(2003)「『社会志

向性」と「社会的コンピテンス」を教育する(4)―中学3年生を対象とした授業実践―」名古屋大学大学院教育発達科学研究科『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)』第50巻.

- ・小川一美・木下雅仁・吉田俊和(2003)「親が重視する教育目標に関する研究―『総合人間科』および『ソーシャルライフ』の教育目標との関連から―」,名古屋大学大学院教育発達科学研究科『中等教育研究センター紀要』第3号〔1〕.
- ・名古屋大学教育学部附属中・高等学校編(2003年)『新しい中等教育へのメッセージともに学びをつくる―』黎明書房.
- ・小川一美(2004)「実践に関わった研究者として感じたこと～今、なぜ、対人関係能力を高める教育実践が必要なのか～」名古屋大学教育学部附属中・高等学校主催中等教育研究協議会ソーシャルライフ分科会発表資料(未刊行).
- ・立川恵理(2004)「『心のしくみ』についての授業」名古屋大学教育学部附属中・高等学校主催中等教育研究協議会ソーシャルライフ分科会発表資料(未刊行).
- ・出口拓彦・木下雅仁・吉田俊和(2004)「生徒の社会性を育む授業の効果①―質問紙による測定―」日本教育心理学会第46回総会準備委員会『日本教育心理学会第46回総会発表論文集』p.395.
- ・木下雅仁・出口拓彦・吉田俊和(2004)「生徒の社会性を育む授業の効果②―面接による測定―」日本教育心理学会第46回総会準備委員会『日本教育心理学会第46回総会発表論文集』p.592.
- ・名古屋大学教育学部附属中・高等学校(2004)「3. ソーシャルライフへの提言」『平成15年度文部科学省研究開発学校研究開発実施報告書(第1年次)』pp.50-53.

## 学会発表等

- ・木下雅仁「社会的コンピテンスを高める授業実践～『ソーシャル・ライフ』を導入して～」(学校心理士会東海支部第9回総会時研修会、於：名古屋大学教育学部、2003年12月20日).
- ・中村明彦「ソーシャルライフの授業実践―中学2年生と3年生を対象としたプログラムを中心に―」(名古屋大学教育学部附属中・高等学校主催中等教育研究協議会、ソーシャルライフ分科会、於：名古屋大学教育学部附属中・高等学校、2004年2月13日).
- ・出口拓彦・木下雅仁・吉田俊和「生徒の社会性を育む授業の効果①―質問紙による測定―」日本教育心理学会第46回総会(富山大会)2004年10月10日.
- ・木下雅仁・出口拓彦・吉田俊和「生徒の社会性を育む授業の効果②―面接による測定―」日本教育心理学会第46回総会(富山大会)2004年10月11日.